# 重修真書太閤記

四編 十

~13
459
40

昭和13年
門数 5
號 459
表 40

消印

# 重修典書太閤記四編卷之廿八

## 淺井下野守久政自害の事
## 并信長より城中へ使者の事

朝倉義景自害して越前一國忽に平均し國人とく織田家に降參をゝう共其國風強勢にして土民等一揆を起さんことを木下藤吉郎が伺て計ひ知たりけるとい密に信長に言上し置けるゆへ信長其遠慮を感じ即降參の者共へ越前の仕置を任を置直に江北へ引返し虎御前山の城に入をゝふ去てたゝ大軍にして猛威を振ひ給ひけるゆへ

同攻會印

て知この十日てうの内ゑ越前を打取五代武勇の朝倉と滅しあふ太刀風あるとめも利刀めて竹と破るく大形あるうと拂て見へけるゑを淺井の滅亡も遠からぬと小谷城中の者とも色を失ひ防戦の用意いとかうけとゝ木下藤吉郎秀吉はかねてよう舎弟の小市郎秀長ゑ竹中半兵衛尉重治とさ〜添千餘人を引分淺井父子の城の間ある京極曲輪といふ処へ入置たうけとゝ父子の間の通路を立切とおのゝうゝ籠中の鳥の如くゝて朝倉勢の追討ふうとるゝを見あうゝ跡ふう慕ふとも叶てゝ徒ゑ見物ゝてを居たうける然ゑ木下藤吉郎越





前ゑう返るやいなや信長の命とうけ手勢を引連秀長と一ゝゑあう小谷の城を眼下ゑ見下したゝ一時責ゑ責つふをべき勢とあゝけとゝ此口の大将三田村左衛門尉大野木土佐守両人ゆふうゝとやおのひとゝん八月廿八日早天ゑ役所を渡ゝて降参を信長さうゝ久政の居処を一攻をめよとて一晝夜息とも繼ぜゝ責付信長の旗本とも京極曲輪へ移さゑ諸手の陣々を一目ゑ見うゝて下知とうる淺井下野守久政い朝倉義景自害ゝて越前一國平均ゑ織田家へ切從ゝ由を聞當家の運も今ハ是迄あう長く防戦をとも始終勝へきゑあうゝ某

てゝや〳〵自害〳〵て士卒の命を救ふべ〳〵とて東野左馬助千田采女正西山丹右衛門尉井口越前守等ふたゝび防き箭射て敵を入たゝるゝと下知〳〵その日の申刻より尋常より腹を切て死たゝけるを日頃目を拭て暱ひ近付ける舞の師の鶴松大夫といふめの心も剛より忠義心のめのたゝまはひ〳〵〳〵走う廻り双錯しその身もそゝまて自害〳〵たゝけるか〳〵と見るよう東野千田西山井口今ハ何時とゝ期をぐきそとて敵よむうふて切死より死もあり罪作りふとて腹切もあう思ひ〳〵の成行より此曲輪ハさて落ふけう今いてや長政の居るふ曲輪ぞうふ





りけるにより惣軍一所より打あつまう十重廿重より取まき鯨波をあけ〳〵攻たゝけう然るに城中より
ても浅井石見守赤尾美作守脇坂甚内木村太郎次郎淺井縫殿助田宮新七中島九郎次郎同彌兵衛等何とも名譽の勇士あるとい最期の合戰ふぞふふひとて人ふゝらゝるゝと互ふいさめいけめられゝく防きけるゝぞ寄手もわゝくせあくんて見へたゝけるに木下藤吉郎ハねてよう淺井家より脇坂甚内とゝふ壯士あることを知たゝけるい如何ふのてゝのれを助けやとあのひつをとゝも淺井の滅亡そてゝ今日ふせまれう彼等必定長政と共ふ

生共ゝ死んと思ふるべきれを彼等を助けんた
めゝ長政助命の由を謀るべ〳〵この事彼等が
方へ聞えるい決〳〵て長政ゝ先ゝ死をることあ
べ〳〵しとあるひ付〳〵ゝ聽て木下信長の陣處
へ參上し當城只今落ひべしさてゝゝ長政も去
勇士ゝそとゝ從ふ士まゝ尋常ゝ死狂ゝ切
て出るゝ味方も多く損をべ〳〵因て和睦のことを仰
入らるとその怒氣を緩めその鋭氣を挫きさてその
ち重ぬ〳〵何樣ゝも御計ひあるべ〳〵と存ひとゝ上
〳〵ゝ信長もその義ゝ同〳〵ゝひ不破河内守を使
〳〵て長政の方へゝきれけゝゝ合戰の習止とを



を得ゝ〳〵て是迫ゝ及ふゝと武門の常弓箭の意地是
非ふきてゝふひ義景い勅定ゝ背き天誅を蒙ゝそて
に亡ひひ佐備州の事い我元ゝ悃望〳〵て縁者と
ゝ〳〵わとの義ゝ只今如何時宜ゝ及ふと云とも
聊以疎意存をひひ願ゝ〳〵ゝ居城を退出あゝて存
命をさ切ゝふべし料地のことゝ追て沙汰い〳〵參
らひべ〳〵ひ左ひ者淺井の家名も斷絶をべ信長ゝ
本意も全く大慶ゝとゝ過べとゝ送ゝ〳〵ゝ長
政使者ゝ對面し弓箭の運つき旗下の侍とも御陣
頭へ參向し累代重恩を施し慈惠を加へ〳〵者ゝて
もいい〳〵ゝ背きひて當家滅亡の時いゝゝてれと

覺悟の上い更に人とも世を恨みてゆにあらべ
此期に及ひ御使に入てゆ出城ふく存命をべき由是まで承たるゆ然
しるゝ〻今さら存命いと何の顔を以て人に合
せゆべきこの段ら自己の所存にまうをゆべくゆ
但御使に對し赤練至極近頃耻入てゆへとも我等年
來の妻女い信長の妹ゆう一男三女をよろこう
是とら其御陣へ送う入ゆへくゆる扶助しをらるべ
くゆこのゆにまうをとて不破河内守と帰
され其後内室小谷方にとの由を告らもしろい内室
もゆゝもされらもとゝ殿のゆゝせゆふ樣を



見たてゝおゆゝ途にと歎うれけるを長政ゆうう
にいさめらゆけるら幼稚の姫君たちのいゆゝ
さとられい是と何として戰場の烟と共に立のゆら
そへき花の如き顔雪の如きそへいゆくゆゝ氷
の刃とあつへきや生先ふと遠きゆくとむゆし
く見ふきんと親のゆきけとも云べうゆゝ只今の
死とおゆひこゝまうゆひこれらう行末を見つゞ
をゆへゆ其上まて我等う修羅の苦患とも救ひた
まへとゆきくとき給へゆやうくに内室も得心
の体ゆうけるゆにゆゝ長政大に悦ひ藤掛三河守と
木村小四郎と輿添とゝて小谷の方と姫君三人を

信長のもとへ送りかへらる
長政の室家は信長の妹名を於市の方といふ母
も坂氏信孝の母の叔母なり此年廿七歳なり天正
十一年四月廿四日越前北の庄にて生害後京都
養源院内自性院を以て牌所とす藤掛三河守永
勝は津田六郎敏宗の孫父を津田右馬丞永政と
云伊勢國藤掛六郎兵衛の養子たり永勝天文十
三年に生たるは今年は三十歳なり
信長の陣にては不破河内守立帰り長政の返答を
言上し終りて今一應長政に退城のことを勧むへし
何といふやうと思案なるに処なるは信長は





小谷の方とよひ姪三人をいとをしく然ふこゝひ不
破河内守を以て前のもとを如く備州事いかゝ
て疎略に存をひと定めて其方にも覺あるべく
は今度の始末全く下野守殿の朝倉を助成をらし
しよう起りのこりて備州の身にかゝりし
こふはそれを既に朝倉を誅して信長の本意
とけは上ら夢く備州に對し遺恨なくはやく退
城あるてかゝりて甲冑を脱をて直垂大紋にて出會
しは度は信長の心中河内守には含ゆうの外他事
あくはと細やかには述らるゝ長政河内守を
近く呼居信長の表裏反覆手の裏をうへしあふと

今より始めぬとゝろれも珍〻〻不存へ共只今の口
狀ゆゝしく以て耳を驚かし世に幾程も生ぬ長政
か詮ろきや条ろれとも左様の甘言と以て賺さる
ゝ長政よりゆゝしく長政もゆゝしの如く武士の死際
の振舞とも存知の上ろう相従ふめの少ふくこも
四五十人い持くゝゆゝそれらに狂ゝて信長の侍百
人あまりと傷うんとをいさゝて左様にいゝろ〻
めのと誰うゝとを知さるべき由ろゝ辭を費ことと
なろれといとゝしろゝ河内守あ〻返〻いやそと
ゝ殿の御心の足ぬ所にていべ〻信長い表裏至極
のめのとも思召べ〻殿に從ふ侍中とゝ〻め士卒



未々まて今猶四五百人もいべ〻それらゝ命と助け
あゝん為に御出城あらい廣大の慈惠とゆ〻〻大
將達い各の心まてまゝゝ鬼も角も輕さ未々
の者の落城の際に鉄炮に當う矢石に傷らゝゝ事
誠に不敏とゝおのゝあゝゝやと云い長政思案し
て何様某と信長と意趣も遺恨もあ〻ゝゝゝそ
縁者と成てゝゝなれ然共父久政朝倉つゝゝゝて
て織田家と手ゝゝと及ひゝゝい信長父久政を疾
ゝゝゝべ〻然とも父子共に助命あるに於てゝゝ出
城とべ〻此と信長承引ゝ〻ゝい某もゝゝ其方の詞
に從ひかゝゝとゆゝれゝゝるよう河内守心中に

扨いかゞ長政久政の自害あらしことを知さること見へたゞ此答何といふ角さやと當惑さゝいつもよりも信長よりてのちちらふくさ由もあゝんと思ひその義ゝとに難義よいつとも信長よりて仰の如く計ひいべゝこそ河内守い立帰う信長よ長政の口狀を告ゝかゞ信長ゝも何といふゞさやと思慮あうけるういゑゝ久政そてふといちゞ長政急度承引あるゝまつ久政助命のゝこと難澁あうう承知さゝ由とやへゝさて長政出城の後久政自殺し由を聞い定めゝ狼藉よ及ふべゝその分をのゝ心得て用意さへゝと下知あうてのち河内守を城中



よ遣さゝ實よ御所望のむゝ難義よいへとも根本の朝倉を退治仕うゝ上い枝葉の意趣といふへきにあゝゞと思ひ返しゝ久政の御事をも無事よあさゝはを様よ計らひてや依てさやく長政よも出城のゝゝゝへとやけゝい長政よも雑人原を助けゝつゝ普代の侍ともを身を全くあさゝめん為よ出城の用意をふゝたゝける

## 備前守長政最期の事

并浅井家士勇戰の事

天正元年九月朔日浅井備前守長政城中の雑兵士卒を始郎從等の命を助けん為信長の言葉よ從ひ

百餘騎を從へて城を出信長の本陣に至らんと既に城門を出らるゝける処へ久政に付添居うし侍ちらつと來て大殿より廿八日の暮わとて御自害あうその時の始末ものくちをいつまあと委細に告けるい長政大に驚きそや父君に御自害あう川るよふ夫を隱して我を欺くこと信長の例の僻あり安安と偽らるゝことの口惜さ〻て大に怒り罵あうう家老赤尾美作守ら宿所に走入心閑に腹切べ〻ゑちゝ防箭いよとて百餘騎をも門の内外に扣えけをたう信長の方よりていぬくものゝふことのやあうんと用意しつゝるい長政の引返をを見て逃をもし



いて追掛けう彼百餘人のの共踏止つと箭種おゝまで射出し心々に防さけるうちに長政自害したるけるい今い心安〻とて大勢に向ひ手を挫ひて戰ふこう

淺井三代軍記に八月廿五日信長虎御前山に還る小谷を取巻不破河内守を以て嗾を入大和一國を宛行べしと云とも長政聞を廿六日の夜雄山和尚を請し小谷の奥の石切に付石塔を切寄らるゝ徳勝寺殿天英宗清大居士と長政の戒名を切付諸士の燒香をうけ廿七日の未明に竹生島の沖へ沉めらるゝ廿八日巳刻こうに信長の

使來る因て於市の方并ゟ女子三人を信長の許へ返さる廿九日ゟ長政五百餘騎ゟて黒絲の鎧の上ゟ金襴の袈裟うけ朱柄の長刀を以て切て出あるゟ程戰ひよりさ塩合ゟ引て入その夜い終夜酒宴〳〵て九月朔日の朝長政近習小性ゟ向ひ下野守殿の御手ゟ如何御入ゆそと有し時廿九日ゟ御自害ゟ由承りゆとやをゟゟ今い心安し父の弔合戰さとやゟて已刻ゟりに切て出猛勢の中へ面もふらぞ駈入四面ゟ當りて働きゟゟ木下柴田前田佐々の人々長政を捨て城に入んとるゟけるを見て是迫ゟりとて詰の城



の左脇ゟる赤尾美作守ゟ館へ走入長政腹を切ゟ浅井日向守頓て双錯〳〵その身も同〳〵腹切て死〳〵たり〳〵めゟ中島新兵衛尉同九郎次郎木村太郎次郎木村與次浅井於菊脇坂左双並居て腹を切たりけりとゟ

木下藤吉郎い長政出城と聞て心悦ひ信長對面あらいたとゟ久政切腹の事顯るゟ共長政をゟゟめ存命ゟさしめんと思ひ居たりけるゟ久政の事ゟゟゟも長政の耳ゟ入しゟる依て長政大ゟ怒り自害し郎等とも思ひ〳〵ゟ合戰をゟる由を聞その中ゟゟ脇坂甚内もあるゟけるいりゟもゟて生取ゟ為べ〳〵

と下知しけるか長政の侍の中ふ浅井縫殿助同新七郎中島九郎次郎同彌兵衛尉木村小四郎い長政の遺言あるとて一方を切ぬけ何方ともなく落失たり浅井石見守赤尾美作守脇坂甚内木村太郎次郎い猶も敵を打取んと進み戰ひけるか木村い敵二人を切伏く終ゑ其身も討ぢけり浅井と赤尾ら馬を射ゑ落る処を柴田丹羽池田ら勢共あり合てさゑを生取る脇坂い西の方の圍を切破ゑ駈出ふ処を加藤福島片桐追掛ゆき福島脇坂ら乗たる馬のあらゝと突けゑら何ちらのつてなくゝ安治真倒ゑ落たりける加藤福島らゝとより手取あゝ取



難るゝ是を取押へ木下ら許へ連行けゑい秀吉對面し様々ふ理を盡して勸めけるふを安治も主の先途い見課たり然い士を知人ふ任をてんとて木下にあを從ひけゑを爰ゑ浅井石見守赤尾美作守い長政の家老なるふ異見もをゝ朝倉ふ一味して多年骨を折ぜつることのふくけゑいとく誅をらゑ三田村左衛門尉大野木土佐守い臆病の至不忠のものなりとて是い追放をられける中ふも赤尾美作守の末子虎千代今年十五歳なりける信長の本陣へ推參し父をひ美作守他人の仆錯ならゝふらゝ存いあるゝくい某ふ御ゆるゝゆへ父ら冥途

とも諸共に助け行ひくやと願ひけるを信長聞食
その志を感じ給ひ多賀休徳齋に預けらるこの虎千
代よくいさましゐへ後ゆくゆく武士となるべし
と宣ひけるゆゑ赤尾孫助とて武勇の譽也
ふたりさ武士とゐうねり〳〵て信長よい長政の内
室と尾州にぞくし返し織田上野介あつけ三人
の女子ともに清洲の城中に扶助しおうまとうと
織田上野介信包い信長の弟永禄十二年より勢
州上野城主とゝて五万石を領さゝと

重修真書太閤記四編卷之廿八 終



# 重修真書太閤記四編卷之廿九

## 秀吉京極家の息女懸想の事
## 并高次高知出身の事
## 淺井父子自殺し江北悉く信長の有となりしのち
## 木下藤吉郎いよ〳〵先亡の餘類殘徒を搜索して六
## 郡静謐ゐ〳〵むへ〳〵と下知ありけるゆゑ木下
## 人数を召具し日こと〳〵夜こと〳〵山林幽谷まても吟味
## しけるかある夜観音寺山の麓を過けるゆゑそう
## 笙の音の聞えけるゆゑ耳をすましあけ行めゆ空
## 澄こゝる秋の夜に妻戀鹿の聲ゐゝてこゝぬの嵐う

松風おのいうゝをあのくとも駒をひめくて
道芝の露よそめける月の影めをしう西の山のく
に入とも知をあとめるゝ槿花一朝の榮の爲よ蝸
牛の角の地を爭ふめゝる亂の世間よさても優美
乃一構あふ浦山し誰人の遁て住る宿とやと伺
ひ見とゝ表い門塀高くめまく裏い築地よ雜樹を
植いとのの古ー庭の体よーあうけるを見へたと
けるその内よて女のむける凡音よ聲うるゝさ
歌の節實も猛さ武士の心を和けゝるゝや秀吉を
ちめ從卒まて心中醉るめゝく頭をゝれ耳をを
まゝて余念ゝく主從一所よ芝居ーて此日頃長陣



よ勞ゝーてとも打忘ゝ居たゝけるや秀吉立あゝう
北江州盡く織田殿の御手よ入けゝい山林幽谷を
ゝ織田殿の領知ゝう是を糺さそんいあるべゝゝ
ゝ然とて此屋の体土民の居所よあるべゝゝゝ歴
歴の郷士ゝ國人の住処あるべゝ何ゝもそよ能々
吟味を遂んとてまゝ表門よ廻う士卒を以て案内
ゝーけゝい門内俄よ騒きたち弓よ鉄炮ゝと呼え
る聲ーて多く有とい聞えぬとも防戰の用意をる
めゝと知ゝとゝう士卒とも扨者落人のめゝくれ住家ゝ
ゝべーー打破て皆殺よそんと勇ゝ立ゝ秀吉制ーて
楚忽の振舞ゝとべゝうゝまつ主の名を尋ぬべー

と下知しけれい兵士門際ゑ寄て大音あげ當家の主人い何者ゑるぞたゝめゆや出らふべゝめく云ゑ横山の城主木下藤吉郎秀吉織田殿の命ゑよう淺井の残黨を穿鑿をんたゝめ廻村をる処ゑゝといゝをゝめゝ内ようゝ是い江北屋形京極家のゑれゝ乃果ゑゝ夜中といひ野武士めゝくゝゑ強盗ゑんどのをゝ入をるめと存をるゑゝよう最前の如く弓鉄炮ゑゝとを集むるさまをゑゝていゝ信長の御内木下殿ゑゝい此方へ入らをゑゝふべゝ主人御面會中べくゝい去ゑゝゝ手せまゝく女性児童の住居も程近くゝいつゝ嘸恐怖をゑゝふへゝ御勢をゝい外ゑ残さと



御近習をゝゝゝゑて御入ゑるべゝとやゝいよゝ秀吉扨ゝを只人の家ゑゝていゑゝゝひとをて兵士等をい悉く門外ゑ残し置加藤福島片桐等僅ゑ五六人と召具ゝ門内ゑ入い家人一人出迎ゝ一間ゑ請ゝ入ゑゝゝゑゝて主人とゑゝゝゑゝゝゑ若者出て座ゑ著とゝれい年のゝと廿三四ゑて色白く氣高く人品穏やゝに行儀作法凡人とい見へゝ秀吉丁寧ゑ會釋ゝて京極殿の御曹と承をるその本末を具さに語らをゑゝとゑゝゝけれい彼若者袖ゑを收め是い江北六郡の守護京極武藏守高吉の男高次とやゝのゑゝゝい

京極宰相近江守高次慶長十二年五月三日薨行年四十七歳と云い永禄四年辛酉より生るゝ一人にて天正元年いくつかより十三歳なり其廿三四歳と云よりれで天正十一二年のことにして織田殿薨さらゝ後の事なり又高吉い武藏守と稱さゝ長門守と云武藏守い高吉の父高廣なり

江北とら淺井う心より任さて所務しゆよりう京極ら有共無う如く累代の家人も時の勢より從ふ習よてそへて淺井より隨身し結句京極と云者なくても事かゝゝなりと云様ふなり行ゆつゝ父よてゆ高吉も草深き此山蔭ふ一期と果し埋木の花さゝゝと春





ともよたを空敷なりし後い兄弟三人いよく國人ふい疎まれ呂川ゝふ者も追くよりうを求めて退散ゝ川ゝい出入さへ心よりせゝ何とるるべき身の果そとおのひらつゝ十餘年只朝夕の手ぞさひい弓と射馬と馳るのゝ云甲斐もなき我身の上語るも涙の種そうゝなるよこの頃淺井も亡ひ江北いそべく織田殿の手より入ゝと承られい京極の家より立かへふべき頼も絶てたり出家遁世して高野根來の山奥ふや分入んまゝ山川の深き淵ふ身とや投んと徒ふ心と苦ゆのゝと云い木下も哀と催ふし扨く京極殿の子息達よてまゝ

しけるあや去いろそらめよう由ある人の住居
るらゆとあ〜ちうう〜ある淺井亡ひて江州一圓
よ信長の手よ入うくいひへとも名家のことてとさ
らせあつを此時節京極再興の手段あさもい
らぐ信長近日江北の仕置として入部あらい披露
と遂一郷一郡の主とあ〜ま〜そべ〜努々出家
遁世ろんとあるへうう〜び固く思ひ止まあべ
〜と約束して木下らさて帰うけと
流布本此次よ秀吉高次の妹よ面會しとの容色
を愛〜こ目ろ為よ高次兄弟と信長よ勧めて江
北の中よて所領と與え〜め其妹と小谷よ呼





迎へ側室とろと是松丸殿の事と云一段あと
こも事實誤るか故よ此ものと削る今按よ松丸
殿と云い京極高吉の息女よてそ〜め若狭國武
田大膳太夫義統の嫡子武田孫八郎元明の室家
ろう孫八郎元明天正十年七月廿一歳よて生害
あ〜後秀吉京極氏と納て妻とろ〜伏見松の
丸よ置因て松丸殿と稱と太閤覺とらもし後壽
芳院月晃盛久禪尼と云洛陽誓願寺再興檀主之
信長江北六郡仕置のこめ入部あうて木下ら横山
虎御前両城と堅固よ持ちさへ〜手柄と賞〜小谷
城責の勲功と感とらもと伊香淺井三郡の内十二万

石と本領に加へて廿万石を以て小谷の城主となし給ふ秀吉そこに小谷に入城ありて熟おもふ様江北を元られ佐々木京極の領地なりしと還仙寺入道病身たるを以て上坂恭貞齋と陣代とふそうろう終に京極屋形の權を失ひ淺井ら國政を專にそろるに至りしなり

佐々木源三秀義の長男太郎左衛門尉定綱の子四郎左衛門尉信綱承久の勲功の賞に近江國の守護職を賜りたり信綱に男子四人あり長男重綱二男高信三男恭綱四男氏信と云重綱高信を母異けるい家督ととび恭綱氏信共に本妻川



崎五郎平為重の女の所生なるを以近江國を二に分て恭綱に江南六郡を讓る即六角の祖なり氏信に江北六郡を讓る京極の祖なり氏信の長男満信その子宗氏その子高氏洛陽京極に館して住居をいたしめて京極の佐々木と稱と高氏入道して道譽と云道譽の嫡子大膳大夫高秀その子中務少輔高詮その子治部少輔高光その子兵部少輔持光その子中務少輔持清その子中務大輔勝秀早く卒し嫡子中務太輔高清幼年の間叔父黒田判官政光名代として六郡を治む高清入道して還仙寺宗意といふその嫡子中務少輔

高峯その子武藏守高秀その子長門守高吉その子高次と上坂泰貞齋と云々治部大輔景重のてゝあり景重ハ梶原景時の孫景信の後裔ゝ平兵衛尉景家の子なり景家江州坂田郡上坂ゝ住しけるゝより上坂と称せ泰貞齋永正十四年三月五十三歲にて卒せ實子なきゝより土岐成頼の子を養て今濱城ゝ居しむ兵庫助景頼といふ又京極の末子を養て上坂城ゝ居しむ治部大輔高景と云景頼明應元年ゝ生まれ泰貞齋ゝ卒せ時ゝ廿六歲なり然るゝ上坂兄弟驕奢ゝて國中の士庶の心を失ひ川るゝより淺井新三郎亮政兵





を起し今濱上坂を襲取終ゝ江北六郡の士庶然ハ京極の家を取立たらんゝ代ゝ自然ゝ靜謐の基たるべしと の心穩やかゝなりて上平の郷ゝ所領を沙汰しけるゝより果して木下い政道ゝ私なく良將うるおゝひそなるこゝ上坂ゝ付とその德を慕ひ其化をよろこびしゝ江北廿万餘石旬日ゝして治まりぬ爰ゝ堀次郎ハ最初より味方ゝ來り度くの忠勤あるゝとて坂田郡六万石を安堵をしめ阿閉淡路守ゝ志賀郡二万五千石磯野丹波守ゝ高島郡六万石新庄の城ゝ付て賜ふ虎御前山の砦を破却し是より後合戰あ

ふまゝ〜けまゝ此砦不用あゝと觸らるけるよよう
百姓いつまも安堵〜て農業とくけまんとを悦ひけ
るよよう同九月下旬信長岐阜へ還御まゝくける

黒田官兵衛尉江州逗留の事

并三好左京大夫義継滅亡の事

去元亀元年信長くゝめて越前へ亂入あうけるよ
よう淺井父子織田と手切よ及ひ朝倉よ一味し信
長へ敵對し合戰度々よ及ひ〜う今歳天正元年八
九両月の間よ朝倉淺井両家滅亡〜越江をへて織
田家の領とあういまい威風遠く扇き靡うぬ草木
もふうう〜けう爰よ播州御著の城主小寺藤兵衛尉政



職と云ふ村上源氏具平親王の後裔よ〜て赤松の
庶流也

赤松律師則祐と共よ大塔宮よ熊野十津川吉野
よ從ひ奉う〜小寺相摸の後あう

〜此時中國よ毛利四國よ三好長曾我部隣國
備前宇喜田直家いつまも猛烈の剛將あう〜然と
て遂よ天下の武將たるべ〜ともれのうとを政職
いゝくおのよ様ゆゝる亂の世間よ生まとあふたる
身の不祥誰よもあれ四海を一統し弓箭の棟梁た
らん人よ從ふて涯分の運を試〜眼前の災を免ふ
へ〜と思案し一門ナ様の末くまて招き集めて評

定しけるゝ何もやけるゝ東國のこゝ聞たる迫ゝ
ゝて定ゝく如斯と知ゝゝゝし中國の毛利い國あ
まる領ゝて勢多く一族いつゝも智勇兼備ゝて龍
の如く虎の如し恐くゝゝろ右ゝ出るものあるべ
からゞ

天正元年い毛利元就逝去の後三年ゝ嫡孫輝
元廿歳叔父吉川元春四十四歳小早川隆景卅九
歳その外小輔四郎元清少輔七郎元康藤四郎元
總ゝゝと云
然い此人ゝ從ゝて二心ゝく忠義を盡を程ゝゝゝ
如何ゝる敵ゝ逢とも早速ゝ後援を請ゝ便ゝゝら



んとやのゝゝゝる時元い備前國福岡住人今
播州姫路の城主黒田官兵衛尉孝高ゝゝゝ宇多源
氏佐々木の支族ゝて源三秀義六代の孫左衛門
尉宗満ゝゝて江州伊香郡黒田村ゝ住をゝゝゝ
ゝて氏とゝゝたるゝ宗満七代美濃守重高と云即
孝高の父ゝゝ
宗満ゝ京極の祖満信の二男宗氏の弟ゝて道譽
入道ゝい叔父ゝゝ宗満の男備前守高満その子
出羽守宗信その子黒田四郎高教その子備前守
高信その子兵庫助清高その子四郎政光その子右
近大夫孝政その弟美濃守重隆その子美濃守識

隆太永四年甲申姫路にて生る今年天正元年五十歳其子官兵衛尉孝高天文十五年丙午姫路に生れて廿八歳なり但美濃守重隆の代より播州姫路に住すと云

才智發明なりて軍慮ふかさとさ侍るけるか進み出さゝやかるゝ面々の評定もてふ理に當る一夫の上も兒角ゆに及ぶゆへ共もあまりいふ此座の末に連なりて所存をゆさぬを如何よい間ゆゆしく見ゆべし柳當時弓箭を取て四海を鎮撫萬民安樂の基を開うん人ハ濃州岐阜の織田信長なるべしそれに繼て終る天下武士の上首なるべし江州



長濱の木下藤吉郎秀吉なるべし毛利家の武威さかんなりて肩を並ふるものなきゆへども輝元朝臣我國を失ふさらん謀をのゝ主として遠く出馬の催ふし織田信長ハ尾州半國より起て濃州勢州江州を并を將軍家を補佐して天下を一清し朝憲を奉じて違勅を責されゝ朝倉淺井を両月のうちに誅罰して越前を取て嚢中の物を探るに似たりそれらの謀をへて木下藤吉郎ハ方寸より出し処と聞然ハこゝ此人と好を通し親を結ん時ゝ如ゝこ存をるい辟事にやとヤ出けるゝ政識耳をとゝまりて閑居たりしか何様御追のいとる

処實に遠慮して流俗の人の心付さる処あり然いくもく濃州に趣き知田ゐて織田家に音信を通し親しくを結ちるべし但他人にそ培明より御邊今ようう打立ゐ入くゐ小寺と名乗て登りるゐくと云ふより孝高とるゐも江州に來りまつ木下に面會し一言二言ゐらふ秀吉ら九智ゐ〜ぬまを さとる聞〜に増る侍ゐるかとい〜ゐ奥深く思ひまるとい秀吉も又西国の侍大将と得ようとて奔走し岐阜へとゐもゐひめくと中入ゐ織田殿とゐやうに對面たまもうゐ種々ゐめてゐ一品品の物と賜ちるけるふより孝高面おとして帰國したるけ如斯遠國まて織田家みゐびく世間に九月の末長島の一揆まる蜂起し尾勢の間処々に亂入とるゐ注進あるけるゐ



り廿四日信長大軍を率して馳向とをゐひ即時ゐとれを平けらる中ゐも越前の毛谷猪之助取ゐさよく軍して多く敵を亡しけるとや

杉谷善住房を捕へ土中に埋め竹鋸を以て引七日めに殺をしい此時ゐくと信長譜ふ云

十一月十日信長上洛ゐしひ直に河州へ發向あして若江の城と攻ゐふゐは城主三好左京大夫義繼の室家い將軍義昭卿の妹ふるを以て始終義昭卿を補佐しふくび事を起さんとゐやあらんと信長猜忌あるるゐあまりにゐく不意に押寄ゐひしるく木下藤吉郎然るべくべと諫やしを以て何とるく上洛しゐひその席に下

向あうけまい義繼打て出よう〳〵戰ふて同月十六日城中みゝて
自害しけまい三好の家嫡いさて亡よひけう
三好義繼ハ修理大夫長慶の二男あう舎兄筑前守義興永禄六年八月廿
五日早世の後其家督と嗣時ゟ十三歳と云ハ今年廿三歳あう抑三好筑前
守之長細川六郎澄元の後見として永正三年四月上洛し同四年澄元養父
政元の家督と嗣けまい之長入道希雲是と助け万事と執行ひけるふ
前將軍義植防州ゟう上洛ゟ〳〵新將軍義澄と合戰〳〵一勝一敗ゟ
ちまちふ〳〵て永正十七年五月希雲とゟひ子の長則長光自殺〳〵つ
まい共希雲の三男筑前守元長ふ〳〵ひ兵と興〳〵て澄元の長男晴元と
助く元長の長男修理大夫長慶あうこれハ三好天下のゟう今年迄六十七年と曷

重修真書太閤記四編卷之廿九 終



# 重修真書太閤記四編卷之三拾

## 冨田彌六郎長秀謀叛の事
## 并明智光秀敵と然く事

天正元年將軍義昭卿槇島と退去ゟ〳〵ゟ九月朝
倉淺井の両家滅亡そ〳〵ろハ織田信長の武威四方ゟ
溢まわとんと海内と震驚ふされゟ麾下の諸將ハ
螣蛇の雲霧と興し蛟龍の天淵ゟ騰る心地〳〵てそ
の力山と拔その氣世と蓋ひ川べ〳〵ゟそ〳〵その領國
の民ゟ太平遠ゟうと面々家業と安樂ゟとんと近
さゟあうと喜ひ樂むそその際ゟいつ〳〵ゟ天正も二

年とろう今年い取とけ目出度春ゐうとて信長ひとしほ悦喜まし〳〵けるといふ岐阜の城まして歳の始の祝の式いりようも猶ゐさ〳〵爰に越前國の事い木下藤吉郎う言上を〳〵旨あるゐよう前波九郎兵衛尉吉継と桂田播磨守長俊と改め一乗谷の朝倉居城の跡ゑおいて一國の政務を奉行さ〳〵めて先方の諸士を支配させられけるか安きに居て危さとおもてゞ十分い缺るのそ〳〵めと云詞の如く播磨守過分の仕合ゑ逢今やゝ主人の居城として一國の士庶膝を屈し手を束て禮をゐしける処ゑ任し人を人ともおもてゞ振舞けるゑよう今まて肩と並へ〳〵同僚ども我下僕と一列ゑ見ゐ〳〵自然と栄耀を極め上見ぬ鷲の氣色ゐうけるを嫉し惡しとおもふものも多かりける中ゑ府中の城主冨田彌六郎長秀い播磨守と親しき間かりゐるうへ武勇ら等倫ゑ超その下風ゑ立べきのゐらばうつ木下う許へ降ら〳〵時も同じわとゑ走廻うけもら只今長俊うふるまひを安かりぬとかゐゐと日頃目とそぞたてう居らうけるかゐのころいうゐも堪忍ゐうぬ事ゐを出來そけまてそのゆへハ冨田う一族ゑ毛谷猪之助といふものゐう是も同じく大岳より木下の陣へ走込し者ゐうけるか去年信長勢

州長島へ出馬あうて退口ととこぶる難澁あうける
に猪之助比類なき働させうゝ恩賞厚く行ふ
るあらんとおのゝ居たりけるよ何の沙汰もあろ
ア〜を富田彌六郎い一族の事よてゝあう與力よ
てゝあうゆゑ〜止ことと得ど桂田へ右の旨をゆ
立信長公の御前よろ〜く取成賜へと頼し
ゆゝ播磨守心得うと請合ふうう一向らしと信
長へゆも出さびあまつさへ年始よ岐阜へ参上し
て富田彌六郎毛谷猪之助そつかたうの心をと
あうとて莫大の恩賞を貪う法外の訴狀をさてく
ゐもとを取上げひゝら向後爭亂の基たるへく存い



たゆ〜所領を削ア以後の戒とゐをべくゆとゆけ
ふふふう越前の國のことゆとをゆくも長俊う心の
まゝに計らふべ〜と許されけるよう桂田下國
てその趣下知さんとせゝに途中よう眼病をうと
ひ越前へ下う着ても更よ快氣をゝ終よ盲目同様
ふう〜ゆゝまつ引籠う三奉行會合の席へも出仕
をゝ居ようけるをゝ重代の主恩よ背ゝ〜天罰と
人ゝふ凡彈とそふ〜たうけるそれのゝふうゝ岐
阜ふて富田毛谷の身の上を言上して様くよ讒言
をゝ〜ゝいうふ〜て漏たうけん両人の耳よ入しゆ
ゝ両人以の外よ腹を立我々か勲功をゆ立て恩賞

とゞ請ておそ一族のうちの長者の甲斐をあまと
ま等ゝ本領を削らんこゝろそも何といふてどやい
やいな此長俊ゝても我々を引立て世ふあらせん
とゝゝおのゝふまゝ却て身々の仇とふてなん桂田
と打滅して越前一國を押領をたゝかとおめひ立増
井甚内等と相談し先亡の餘類國中の郷民等をか
たらひ一乗谷へ押寄晝夜三日の間息をも繼をゞ
責けるゝふぞ桂田長俊終ゝ討ゝて妻子從類一人も
殘らゞ滅ひふけう

北陸七國志ゝ桂田冨田不快ふうけるゝよう毛
谷ゝ恩賞のおとゝを披露をゞ却てあれを諍訴し



なゝい冨田毛谷弥桂田を怨こけるか桂田ゝ天正元
年十二月下旬京都ゝ帰國しける路ゝう眼病
ゝて下著の後別ゝて痛ちふゝゝく終ゝ盲目
とうゝとゝ然るゝ冨田毛谷同意の者を催ゝ
に丹生郡の領主魚住備後守景固鳥羽左近次郎
等一味ゝて天正二年正月十八日桂田ゝ一乗谷
へあゝ寄長俊を討取桂田玄蕃允をゝ生捕てゝ
まゝを斬長俊ゝ母女房一子新七郎ゝ深雪の峯を
越て落行けるゝを尋出ゝて三人共ゝゝを殺を
といゝう

此上ゝ北の庄へ押寄三奉行を討取べゝとて冨田

毛谷増井の輩正月廿一日の拂曉より一揆ども数万人よて責付たく織田方の三奉行明智十兵衛尉木下助右衛門尉津田九郎次郎の為て岐阜へ注進したくけるゆ信長聞食さるとあらめと思召たるけふののとて更に驚うとゆふ御氣色もなく奉行等ハ軍をとゝゆ無事ゆ引返をゆ然るべきれと仰出さるとけるゆふ三人の奉行衆無事ゆ北の庄と引拂て退くやとおもふ処へくや一揆ども むゝと寄來う取圍て責けるゆふ城中ゆつゆ五百餘人目よあまる大勢ゆたゝせ向て何うをんまた百姓原のたゆふ討死をんも口惜き次第ゆふうい





かゝとくやと評定を明智十兵衛光秀いくゝ一揆数万人四方を取めこゝたるを通ゆ出べき道もふしたとへ五日十日防戰をるとも無事ゆ帰をとの御下知あれを後援あるべきもふ〜無益ゆ士卒の一人よても損して益ふ〜何とそ〜て敵を欺き退去をへ〜と工夫しけるゆ急度謀を案し出し明智弥平次光春ゆ其手たくとゆ含め一揆の陣へ遣くゝけるこの時冨田も毛谷増井も少し隔て有けるゆ三奉行の使者あゝと聞て一揆の陣へくを來ゆ光春を呼入たゝ光春臆をる色もなく冨田長秀ゆ對面〜てゆけるを各々桂田播磨守ゆ宿意あ

アて打果さんと武士の意地なるとい咎むるふ及
ん然るに當城を圍ミ奉行を討んと謀らるい事
近頃以て心得ぬくい信長越前國を切取いへと
も國中の政事をあらためらるを桂田播州と以て
ものの守護代とふさと其外い面々本領を安堵し
て舊例を執行ひあふあるそやされい此度の一
條その始末を委細に書ちるめ我等三人ふよく
その事實を得道さを岐阜へかくやをと仰せられた
らんまい我等もやがて落ちて岐阜へ注進し各く武
士の意地なて少も誤ふき由を言上しいべし左あ
らい信長何とて奉行のや定めしことを破らるべけ



ん必定面々の本意をそやうふ上ふ聞えて年來の
遺恨ちれやべしその上ふて桂田の跡の守護職た
るの手ふ落つるやそれを信長の意ふいへとも國
人をそそ〻他國の人を用ひやべさいちるし然
ふを三奉行を責殺しむち〻各くの武士の意地ふ
て桂田を殺をしことをやちるけん證人もなく道理
を以て非理ふ落ちあふべしその上奉行人を殺さ
罪を正さんとて木下以下の侍大將忽ふ走向ひい
ち〻各々何ふ猛くとも何わとかあらくあふふさ
然らい道理を以て桂田を討果したることすて後闇
く聞えやへし信長を敵ふなして軍をられんと元ふ

アの本意あるもあるべきこと併三奉行ふ宿意あり
て是非ふ一戰とのことにいたり我々とてもやうく
と討といをり各く自滅を招かるべき無名の軍をら
ばんよりちやく相當の音物をとりのく三奉行と
共ふ岐阜へ參向あるべき此等の処よくく評定の
のち返答あるべきとて光春い城中へ立帰るそ乃
跡ふて冨田毛谷増井の三人寄合て何様光春ゥヤ
をりて道理至極をり然らい桂田播磨守ゥ私曲を
盡くかき記し岐阜へ言上したらんふら罪あるか
のを一族の手ふて誅さり迫のことあれい深く咎め
らるべきわとのことる有ふ三奉行の城をかこらし



罪ふそ遁ぬかくいあるべきれともそもそもハ三奉
行ふよく頼入て程よく取ふしたらんふら強て罪
過の沙汰ふ及ふまし去い光春ふ就て三奉行とか
たらふべき何さま三奉行と責殺したりとて我々
か強そふいあらして信長ふ仇と惡まれんことハ難義
あるべき信長へ取成い三奉行の注進狀ふよりて
なれい三奉行をよくくあしらへそいあるべく
ひと冨田弥六郎毛谷増井内評一決してさて光春
を呼出し仰越るゥ処一々その理ふ當りてハ御居
所を取かとみい事かへもくも誤入くあそいへ早
早軍を帰しいべき岐阜へ幾重ふもあやまりあり

様御取成仕ひ角〳〵と厚くこひ入光春を様々の
てゝ〳〵その〳〵ち軍兵を引上人質を城中へ送うけ
とい明智光秀此返答を聞て大ゝ笑ひ今ハ心安し
さゝい當城を引拂ふべ〳〵とて人質を先ゝ立江州
路を経そのち人質を帰し難ゝく岐阜へ帰りさて
騒動の始末を具ゝ言上し三人ののを欺き〳〵由
をくい〳〵くやけとい信長笑ひわゝ入くよろこび
と光秀ゝ智計を賞しあひけり
一説ゝ冨田毛谷増井の三人ハ北の庄の大手ゝ
向ひ朝倉三郎景纐同安居孫三郎景健二人ゝ搦
手ゝ向ひけるゝ景纐景健ゝ手ゝ和議を申談

し明智木下津田の三人と濃州へ帰しあとより
冨田威を國中ゝ震ふゝ大風の草木を靡ゝとか
如くありけるゝ長秀如何ゝる思慮やありけん
魚住備後守景固と正月廿四日長秀の宅へ招き
饗應の席まて冨田魚住ゝ中ゝけるゝ今般義景所
持あうし中村大刀と得ていゝ御目ゝ掛べ〳〵と云
さゝ景固ゝ頸を打落しそれゝ景固ゝ宿所へ
押寄景固か嫡子彦三郎をも誅せ〳〵由をゝるを

## 越前國一揆蜂起の事
## 并冨田弥六郎長秀戰死の事

明智光秀智略を以て富田弥六郎長秀を欺き士卒
一人も過ぐ三奉行無事に岐阜へ引取ひまい信
長の怒て秀吉に言上さ〜同士討を待をゐふ本意
ある故に富田に私に桂田を殺さ〜ことも咎めず
さてその〜に打捨あうまし〜かも富田弥六郎を
三奉行の返事おそ〜今や守護職の朱印到来さる
めと待居さうしうとも待期をくまい欺まし〜ふや
と心付さうい討手の向ふことのやと内々物聞を出
〜そこれを聞きんとぶ〜つまとも江州い木下か
仕置行さうう物聞更に立入ことかふらに因て長秀
増井等と相談〜信長より討手の向こぬうちに越

前一國と平均に切従へ用心堅固に國を守るへき
ぶう然らい魚住備後守い朝倉の重臣とのひ桂田
と無二の懇志ふまい信長へ内通〜て我等に妨を
ふそ〜きにもあ〜ひとて長秀の宅へ魚住を招
きて是を殺〜その〜ち魚住に館へお〜寄て妻子
をと〜く殺〜長秀威を國中に振ふよりむう
も朝倉今ハ土橋式部大夫景鏡同安居孫三郎景健
同小三郎景鏡の輩朝倉繁昌の頃い國主の一族と
〜て富田等をものの〜ぜこと〜か今い
武勇の劣をと以てこそ長秀に下風にたつあさ
ま〜のうける人心ふう長秀偽て信長に越前の

守護ゐるさとて由と披露ゐしたるける折ふし越
前國の本願寺門徒蜂起して評定しけるそもく
當國い朝倉累代の守護職たりけるを信長のため
に滅亡を然るゐ本願寺新門主へ朝倉義景の壻ゐ
とい我等ゝ爲ゐも親あり然るゐ富田弥六郎ゝ朝
倉を叛き信長ゐ從ひしたふ惡しとおのひしふ當
國の守護ゐんとして國を進退をんこと勿体ゐい
さや富田めを討滅し朝倉の仇を報しその次ゐを
當國とも加州の如く全く本願寺の領とゐべし
とて加州へゐの由と牒し合けるゝ本願寺ゐゝ加
州へ下し置し下間筑後法橋枚浦壹岐法橋ゝ差圖





して七里三河守とゐふのを越前の國の大將
ゐ差越たるしめゝ一揆の者とももく馳集ゐ二
月下旬長崎の城を攻落し城主黒坂與七郎とら
め悉く討取又中郡の一揆い河合の庄乙部勘解由
左衛門尉ゐ館を攻て大勢を討取そのゝち豊原寺
へこゝと集ゐ片山の真光寺ゐ籠ゐたる増井甚内を
討取んと責けるめ甚内無勢ゐそめゐゐ終ゐ一
揆のためゐ討とてけるゐ夫ゐゐ直ゐ毛谷猪之助め
北の庄の城ゐ押寄短兵急ゐ責立て毛谷とものゐ
さゐ討てけるこの上い張本人の富田を討取んと
て府中の城へ押寄一揆の先陣い和田の本覺寺大

将い七里三河守雲霞の勢よて取めこて息どもく
ゝを責たゝ〳〵めゝ富田弥六郎長秀今年廿四歳心
たゝうい猛けゝとても大勢ゝ責立らゝと終ゝ叶ちゝ
うゝゝて〳〵一揆等やゝ〳〵よろこひちつゝ四五
日のうちゝ増井毛谷富田の三人さゝ〳〵も武勇のも
のゝ〳〵ゝ名もゝあゝさ一揆よゝゝゝけゝゝと主を叛
きゝ〳〵天罰ゝゝんと聞人舌をふるひゝゝ七里三河
守この由を加州へ注進し朝倉義景ゝ叛きゝ〳〵三人
踵を廻らさゝ討取てん旨と石山へ言上あるべゝ
とヤけゝい下間枚浦の両法橋大ゝ悦ひゝの競を
ぬゝさゝ先亡の仇と報し盡とべゝ〳〵とて越州へ立

越金津の溝江大炊助を責殺〳〵それより淺山の土
橋式部太夫景鏡ハ正〳〵義景を殺きゝ本人あれ
ハ脱とゝ〳〵とて寄けるゝ景鏡ゝふゝ〳〵とおゝひ
平泉寺を頼らてゝ〳〵くゝけるゝ加越の門徒七万余
人三月上旬ゝゝ平泉寺ゝあゝ寄攻戦ひ四月下旬
まて日〳〵夜〳〵の軍ゝ平泉寺の衆徒過半討ゝ景鏡
も遂ゝのゝゝとそゝゝれけゝ五月上旬一揆織田庄
へ打て出朝倉兵庫助を責亡〳〵けるのちい國中を
角て一揆の進退とあゝけゝ今いあゝふ儘とあゝける
ゝゝ江州へ乱入をゝとあゝひ木目峠の城ゝ
堀次郎ゝ陣代樋口三郎兵衛尉ゝこゝゝ居〳〵

と責取て下間法橋う手勢をあめ置おふ〳〵鉢伏のふもとい大町の専修寺をこめ火打山うへ和田本覺寺さ〳〵尾峠ゟ七里三河守と入置て上方筋と丈夫ゟおさへ置越前一國と本願寺領とふ〳〵かゝ石山ゟう下間法橋を越前の守護とふ〳〵たゝけう信長此由と聞あひさ〳〵い軍勢を差向て一揆と打平くべ〳〵と仰出さるゝと木下藤吉郎めゝく諫め奉りいまゝ一揆の勢さゝんふ〳〵て征伐の時いさらはゝ今ゟゝ〳〵御待ありて然るへ〳〵と言上をしにゝう何さま秀吉うやゝ〳〵如く越前の國同士討〳〵て桂田冨田毛谷増井皆亡ひ〳〵めゝ此後



の事もとへて秀吉ゟまうとらるべ〳〵とそそのゝかひけゝ

一書ゟ天正二年二月上旬七里三河守越前へ發向〳〵長嶋稱念寺ゟ陣し後豊原寺へ陣替を此時河合の八扨と云者乙部勘解由左衛門尉と責落し同中旬西郡の一揆朝倉孫六う三冨の宿所と責て孫六と殺〳〵河北の一揆長嶋を攻て城主黒坂與七と始同彌次右衛門尉同兵庫助小木入道等と殺ゝ又足南足北丹生今立大野坂北河口の一揆片山真光寺ゟ押寄増井甚内と殺〳〵同十三日朝倉土佐守景行の居城の跡北庄へ押寄毛谷

猪之助を殺し十四日府中へ發向し處々より陣と取其勢十三万八千餘人あり富田彌六郎あるを聞逆寄して追拂へしとて七百餘騎を率し帆山河原より戰て一揆を打破り首を取ること二千七百餘級とそ同十七日富田淺水より打出て合戰し頗る勝利を得る処同十八日の合戰より富田う頼切たる小林三郎兵衛吉隆忽心替して鉄炮を以て富田を打落しけるこい此陣いさて破るたりと云

重修真書太閤記四編卷之三拾終

# 三都書林

三條通升屋町　出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　博勞町　河内屋茂兵衛
同　筋本町角　河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
本石町十軒店　英大助
大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛
横山町三丁目　和泉屋金右衛門
淺草茅町二丁目　須原屋伊八
筋違御門外藪籠町二丁目　紙屋徳八